社 会 委 員 会 通 信

No. 61　　2023.8.13

発行：横浜港南台教会 社会委員会
〒234-0054
横浜市港南区港南台 7-8-29
Tel：045-833-5323　Fax：045-833-6616

2019 年度の社会委員会では,2020 年度平和聖日講師として,李 明忠（イ・ミョンチュン）先生（在日大韓基督教会横浜教会牧師）をお迎えすることを決定しておりました。が、コロナ禍でそれが叶わずに来ております。李先生のご希望が、YouTube 配信や、社会委員会通信のみでのご講演は、避けたいというものであったということもあり、またそろそろ対面でじっくりと社会委員会で語り合った上で、今までに近い形で李先生をお迎えしたいという私の希望もあり、少し時間をかけて、李先生をお迎えする準備をしていきたいと思っております。どうぞご期待ください。

2023 年度の平和聖日は、８月６日でした。広島に原爆が投下された日です。この日に合わせて、私が 20 年余り携わってきた国語教育の中での平和教材の扱い、国語教育の変遷を通して、現代社会の問題、変化を語りたいと思いました。また、高校１年生の教材で読まれてきて、新しい教育課程で掲載削除となった、広島の被爆者でもある原民喜著『夏の花』を朗読いたしました。

当日会場参加は、16 名。YouTube 同時視聴は、10 名。２日後の YouTube 再生視聴回数は 40 回でした。猛暑の中、多数の方に関心を持っていただき、ありがたく思います。

これまでの私の仕事、来し方を振り返る機会をいただきましたとともに、これからの私の仕事、希望と努力につながる機会をいただきました。ありがとうございました。

（社会委員長：Ｒ・Ａ）

私にとっての平和教材と国語教育

Ｒ・Ａ

◆はじめに

本日は、暑い中ご参加いただき、ありがとうございます。

本日の予定を先にお伝えいたします。25 分ほどのお話と、45 分の朗読、１時間 10 分ほどの予定で進めていきたいと思っております。

配付いたしましたレジュメやお知らせしていた題と本日の題が異なっていることをまず、お詫び申し上げます。実は、２年前に「国語教科書に見る平和教材―国語教育の変遷」という題で、港南台九条の会の例会で、お話しいたしました。その際は、国語科のカリキュラム改編がマスコミにも多く取り上げられていた頃で、また、「私も平和の語り部」というテーマが与えられており、教科書のデジタル化について、コロナ禍でのオンライン対応などの話も含め、多くの教材、臨床を比較検討しながらの発表でした。心の内、頭の中にあるものを表出すること

で、整理するというまたとない機会でした。が、今回は、私のことをよく知っていらっしゃる教会員の方を前にしたお話です。また朗読を中心とした今回の会の趣旨と九条の会での発表とは異なっていました。日頃私は原稿を作らずに、授業や、礼拝や、発表を行いますが、今回は、『社会委員会通信』発行のために原稿を用意して臨もうと取り組み始めました。あらかじめ原稿にすることで、他者からの事前チェックを受けることができ、題と私の原稿内容とが噛み合わないのではという指摘を受けました。８月２日のNHK「クローズアップ現代」は、「『はだしのゲン』なぜ削除？真相に迫る」という内容の放送でした。平和教材は、かつては、国語教材において非常に大切なものであり、欠かせないものでしたが、今は、とりわけここ数年は、政治的なものを扱うのは難しい、圧力がある、今の時代から遠くなってしまった、試験問題を作りにくいなどという点から、教師から敬遠され、文科省も扱うことを奨励しなくなり、生徒からも、「二度とこのようなことが起こらないように」と感想に書けば良い、遠いところのお話というように受け止められています。そのような現状を私は、憂いております。教科書掲載のなくなった『夏の花』朗読を中心に据えて、私の見てきた国語教育、平和教材について、しばし語りたいと思います。

◆私の来歴１　私の職場

私の国語教育との関わりをお話しするにあたり、私の来歴をお話しする必要があります。と申しますのは、私は、国語教師としては少し特殊であるからです。今日、同じ時間に私達の教会とも御縁の深い横浜磯子教会では、平和聖日の行事として、教会員のお孫さんが、学校で受けている平和教育のお話をなさっているそうです。このことを同僚の横浜磯子教会の教会員から伺いました。私の職場は、クリスチャンが普通にいる、教会の中にいるような雰囲気です。これは、教師としても、また職業人としても極めて稀なケースだと思います。九条の会での発表では、歴史教科書の問題や、日の丸・君が代問題についての話を聞きたいという依頼もありましたが、私の今までの勤務校は、そのような問題には、遠い学校であり、日の丸が掲げられ、君が代が斉唱される卒業式に私は教師として参列したことがありません。また、そもそも私は、教師を志望して勉強してきたわけでもなく、教師生活の半分以上の歳月である15年間は、非常勤講師という立場で国語教育に携わってまいりました。ただ、このような特殊性が、中学、高校生への国語教育を冷静に語る上で、大きな意義を持つものと私は、確信しております。

◆私の来歴２　1960年代後半の横浜

私は、1968年生まれです。幼かった頃の横浜の記憶として、横浜髙島屋前の傷痍軍人の姿が鮮明にあります。母に連れられていく髙島屋、大好きでした。マッターホルンの写真が掲げられている大食堂で食べるホットケーキも、正面玄関前の上品で可愛らしいぬいぐるみやお人形のディスプレイも楽しみでした。でも、白い着物を着てアコーディオンを弾くおじさんの前を通る時、幼い私の心はチクチクと悲しくなりました。思えば、戦後20余年しか経っていなかったのですから、横浜の至る所に戦争を感じさせる事柄や物事はたくさんありました。今から23年前が、ちょうど2000年です。2000年頃の記憶は、まだ私達にとっては、新しいですものね。私の両親も戦前の生まれです。また、母方の祖父は、シベリア抑留を経験し、母と母

のすぐ下の弟とは、11 歳の年齢差があります。小学校１年生の頃の朝の連続テレビ小説は、『鳩子の海』でした。同年の子役、斉藤こず恵さんが唄う「日本よ日本、愛する日本」というフレーズも記憶にあります。夏になると戦争にまつわるドラマが放映され、学校の課題図書には、古田足日『大きな一年生と小さな二年生』などのような現代の子供の日常を描く作品にまじって、『かわいそうなぞう』や、早乙女勝元の東京大空襲にまつわる作品、広島での被爆を書いた松谷みよ子の『ふたりのイーダ』などの戦争をテーマにした作品が数多くありました。横浜の町並みも今とはかなり異なり、小学生の時、できたばかりの港南プールにバスを乗り継いで遊びに来たことがありましたが、本牧を通ると車窓からかまぼこ型の米軍住宅が一面に広がっていました。進学した横浜共立学園では、戦争に従軍経験のある男性教員も多く、（山﨑富治先生にも教えていただきました）多くの先生が、「君たち戦争は、絶対にしてはいけないのだよ」とことあるごとに語られましたし、戦争中、横浜共立学園の先輩方が、風船爆弾をつくる工場に徴用されたこと、５月 29 日の横浜大空襲のお話などもよく礼拝で伺いました。女子校は、女性の先生は独身の方が多いのですが、年配の独身の先生方にまつわる噂として必ず「フィアンセが特攻隊でいらしたのよ。お気の毒ね」というものがありました。

一時期映画やお芝居にも取り上げられて話題になった真っ白いお洋服の「横浜メリーさん」も通学路の伊勢佐木町でしばしば見かけていました。

◆私の来歴３　林京子『二、三秒の闇』との出会い

横浜共立学園での６年間の学びを終えて、私は、早稲田大学第一文学部日本文学専修に進学いたしました。読書が大好きで、活字に触れていれば幸せという少女だった私は、文学を勉強するなら、早稲田と思い、進学しました。ただ、大学卒業後は仕事につくという意識はほとんどありませんでした。仕事を持つより、一生本を読んで暮らせれば良い。私が本を読んで暮らすことを邪魔しない、できれば、うれしそうに喜んでくれる人と結婚できれば良いなどと思っていました。ただ、教員免許だけは取得しておいた方が良いかしらと思い、大学４年生の時に教育実習生として母校に行きました。

実習の時に私が高校１年生に教えることになった作品が、林京子『二、三秒の闇』という彼女の長崎での女学校２年生の時の被爆体験を綴った作品でした。林京子については、当時文壇でもてはやされていた中上健次から批判を受けていたことなどしか知識を持ち合わせていませんでした。中上の林京子に対する批判は、「原爆体験を文学で扱うべきではない」というものでした。ただ、林京子は、「被爆体験を書くために物書きになった」と語っており、淡々と中上の批判を受け流しています。今思い起こすと、中上自身が、自分の出自にまつわる作品を多く手掛けているのに、才能ある林京子に対するこの批評は単なるやっかみではなかったかと思えます。私には、この『二、三秒の闇』という作品は、かけがえのない人生を決める作品となりました。作品の力に圧倒され、私が取り組んだことは、当時出版されていた手に入る林京子の文章をなるべく多く読むことでした。林には、原爆体験の他に幼い頃過ごした上海での体験を書いたもの、家族のことを書いた作品群があります。どれもが、作家として優れた資質をもって書かれていることがよくわかりました。そして、誰よりも林京子の作品に触れた濃い準備の１ヶ月を経て、教壇に立ちました。

教壇に立った２週間、懸命に私が読み込んだ『二、三秒の闇』を生徒たちの前で語る楽しい日々となりました。私が、林京子について読解を深めれば深めるほどに生徒の反応も深まっていく手応えを感じました。大好きな作品に触れ、読解を深める喜びを多くの人々と共有できる、なんて国語教師とは素敵な仕事なのだろうと思いました。実習期間の最終日、担当教諭から４月から国語科教諭として勤務するように言われました。願ってもないお話でした。その場で私が言われたことは、「担当する教材にまつわる資料、その作者の作品はすべて読むくらいの気持ちで勉強し、授業なさい」というものでした。私の準備期間での方法は、共立で当時求められる国語科教諭として合っていた方法だったのです。私の国語教師としての原点は、「読解を深める」というものでした。

◆私の来歴４　国語教師として「読むこと」「聞くこと」

７年間の専任教諭としての勤務後、長男の誕生で横浜共立学園を退職しました。

11 年間の専業主婦生活の後、長男が小学校６年生の年に清泉女学院の国語科非常勤講師として復帰しました。さらに、機会を得て、玉川聖学院、捜真女学校とカトリック校も含みますが、キリスト教主義の女子校で 15 年ほど非常勤講師として勤務してまいりました。

配付資料の①と②は、私が教師になった 1990 年度の教科書と私が復職した 2009 年度の教科書です。掲載作品があまり変わらないことにお気づきになったことと思います。11 年ブランクがありながら、それほどの苦労なく復職できたのは、このことが大きいと思います。とりわけ女子校の国語教育は、教養主義というか、本によく親しみ、勉強する生徒も多く、たとえば清泉女学院では、高校２年生の定番教材の漱石の『こころ』などは、半年ほどかけて全文を読み解きましたし、玉川聖学院では、韓国への修学旅行の事前学習として、司馬遼太郎の『故郷忘じがたく候』を読解しています。文科省の教科書に掲載されていない作品を大切に丁寧に良いものを選び読みつぐ姿勢が顕著です。教科書掲載の作品を全部こなすことは困難で、授業教材を選択するのですが、私の勤務校では、平和教材を外すという選択肢はありませんでした。教員が、生徒が読んでおくべきだと思う作品を、よく勉強した上で授業する、そんな公立学校とは少し異なる自由な授業が展開できました。毎朝もたれる礼拝も大きいと思います。人の話、神様の話、生きることに思いを馳せる時間を多く持つことができるのです。

◆大きく変わった教授法

ただ、この 30 余年で大きく変わったことがあります。

それは、教授法です。そのことは、おそらく社会が教育に求めることの変化であり、社会そのものの変化だと思われます。

国語教育の根幹は、「読むこと」「聞くこと」「書くこと」「話すこと」であると言われます。

30 年前は、「読解」に重きが置かれ、授業ではいかに参考資料をあげられるか、生徒の読解をいかに深められるかが求められ、定期試験に授業で語ったことと同じ出題をすると「私達を馬鹿にしているのですか？」などと言われたものです。15 年前の生徒に求められた授業は、語句の説明をいかに丁寧にできるかというもので、大学入試などに通用する読解テクニック、試験に役立つ実践的なことが好まれました。つまり、４つの根幹のうちの「読むこと」「聞くこと」に重点が置かれてきたのです。

そして現在、今年度私が授業している教科書

が資料③です。随分と目次の内容が今までと異なることにお気づきになったかと思います。現代文ではなく国語表現という単元名であることもありますが、昨年度から高校の国語は、大きく改編され、社会で役に立つ、即戦力になる人材を育てることが求められるようになりました。文学的文章が高校で読まれなくなるとして、多くの文学者が危惧を示し、文芸雑誌などでも特集が組まれたりしましたが、現場の教員からは、小説が読まれなくなる危惧よりも、教授法の変化に自分がどのように対応すべきかの危惧の声が上がりました。社会でも、世の中に出てすぐに立派な働き手になることを子どもたちに求めるようになってきていましたし、若い世代の現場の教員も古典的な作品に親しみ、それを読解する喜びよりも、生徒の発表力を引き出す授業を好む傾向に寄りがちになりました。生徒も、教員も、社会も、「話すこと」「書くこと」へのシフトを求めるようになりました。

この１学期に私が行った授業で例をあげますと、中学３年生で、「句会」を開催しました。「兼題」としてあらかじめ、「さくらんぼ」「夏の雨」「プール」などを与え、句作させ、提出されたものを、無記名でプリントにあげ、投票させて、俳句結社に入っている俳人を授業にお招きして、投票結果に対する講評をいただくというものです。とても楽しく有意義な時間でした。生徒も私も、俳人の知人も真剣に素晴らしい時間だったと思います。ただ一点、私の中にしこりのようなものが残ったとすれば、生徒の選句理由がとても浅いのです。中学３年生だからとも言えますが、良い文、秀句に出合っていなかったことが原因であると私は思っています。自分を表出する機会は本当に増えてきています。教科にも「総合」というものが組み込まれ、論文を書いたりする教科を超えた科目や、テストも増えてきています。私は、国語教師というより、プロデューサーのような感じがしています。高校２年生では、サイコロを使った「自己紹介ゲーム」などを導入しました。６個のお題「自分の特技」「将来の夢」などをサイコロをふることで決めて、発表させるというものです。２巡目は違うテーマで自己紹介させ、お題によって、自己紹介の方法が変わることを体験させました。これはこれで楽しいのです。それに社会、なにより生徒たちが必要としている授業なのです。ただ、「読解」がしたくて教師をしている身としては、少し物足りない気持ちもいたします。それに、それで本当に良いのかという思いもいたします。上野千鶴子、東大名誉教授のフェミニストの方ですが、彼女が、「文学的な文章の読解は、個人的なものであり、学校で習うべきものではない」と発言していました。私は、上野さんのファンでもありますので、衝撃を覚えました。「彼女は、ほんのひとつまみほどもいない女性エリートの考えしかもてない人なのだなあ」とがっかりしました。個人的な行為として、文学的文章を読む人が、読める人が、読む機会を与えられる人がどれほどいると思っているのでしょう。新カリキュラムでは、平和教材は掲載されていません。多くの人々は、教科書で触れなかったら、全く平和教材にも、古典的な良作品にも触れずに、論理的な文章や、取扱説明書、契約書の読み方だけに触れて社会に出ていきます。教養主義的な学問のみに偏る必要はないのですが、何かを「話し」「書く」としてもインプット不足になることは、目に見えています。

◆平和教材の書き手の変容

アジア太平洋戦争に関する文学の書き手の

変容について少し触れたいと思います。

1945 年から 78 年が過ぎ、いわゆる平和教材の書き手も代替わりしてきています。

かつては、武田泰淳、大岡昇平などの戦地へ赴いた男性の書いたものが、主流でした。私が教壇に立ち始めた頃は、向田邦子、野坂昭如などの子供時代に戦争体験をもった人の書いたものが多くなりました。文芸批評家の高橋源一郎に言わせるとこの世代の文章が、子供の頃の体験であるがゆえに一番説得力と公平性を持つとのことであります。そして、1979 年に生まれた高橋弘希『指の骨』(2016 年芥川賞候補作)など戦争経験の無い人による従軍体験を書いた作品などに変容してきました。そして、今日、お話ししたいのは、私と同年生まれの星野博美の視点です。彼女の『世界は五反田から始まった』の視点は、今を生きる私達に必要な新たな視点ではないかと思われます。この作品は、彼女の家族史を綴ったノンフィクションなのですが、「いかにあの戦争を生きのびたか」を今こそ聞いておくべきだというものです。生き残ったことを申し訳なく思わせてはならないというものです。

平和教材は、今後国語教科書にあまり掲載されなくなるでしょう。掲載されたとしても教えられる機会は減っていくことと思います。林京子のエッセイの中に『原爆の図』を描いた丸木俊のことばがでてきます。「体験しなければわからぬほど、お前は馬鹿か、って聞くの」というものです。「体験しなければわからぬほどの馬鹿」にならないためにやはり若いうちに、平和教材に触れるべきだと思うのです。

教員の過酷な労働環境については、よく言われています。教員の仕事は多岐にわたります。しかし、私は、非常勤講師です。しかも、ある程度教材選択の自由の効くキリスト教学校に勤務しています。国語の教師としてのみ働けば良いのです。そのような存在として、生徒たちの成長に携われることは、私の誇りです。

林京子は、長く逗子に住んでいました。その関係もあり、石川町の神奈川近代文学館では、毎年８月９日に『被爆と私』という講演を収録したものを流します。これからも勉強を続けられたらと思います。

お付き合いありがとうございます。

◆『夏の花』朗読

これから、原民喜著、『夏の花』を朗読します。

私が、本日朗読のテキストとして使用いたしますのは、ちくま文庫『教科書で読む名作　戦争文学』です。教科書に掲載された戦争文学８作品が集められていますが、現在はいずれの作品も教科書掲載はありません。

予備知識を少しお話しいたします。

原民喜は、詩人であり、小説家です。1905 年に生まれました。前年に妻を亡くし、故郷広島に東京から戻っていました。被爆当時は 40 歳です。彼は緘黙といわれるほど繊細な性質で、亡くなった妻が間に入らないと編集者との会話も成立しえなかったと言われています。その支えであった妻を亡くし、故郷広島の墓に入れ、一回忌が終わったら、後を追うつもりでいたそうです。そのような最中に被爆しました。彼の実家は軍需工場を経営しており、その実家の経済的援助で東京での作家生活を送っていました。彼の代表作と言われるものは、皆被爆体験を綴った戦後の作品です。ただ、売れはしませんでしたが、彼の戦前の作品、『幼年画』など、とても良い作品集だと私は思います。

妻の死後、後を追うつもりであった彼をして、「これを書かなければならない」と思わしめた被爆体験。ただ、戦後の作品群を書き上げ、1951

年に鉄道自死します。

『夏の花』は、井伏鱒二の『黒い雨』と並び、中学３年生か高校１年生の教科書に掲載されてきました。女優の奈良岡朋子さんがライフワークとして『黒い雨』を朗読していたので、井伏の『黒い雨』の方が知名度は高いかもしれません。ただ私は、井伏の作品も大好きなのですが、他県に疎開していて被爆体験をもたず、釣り仲間の重松静馬さんの被爆体験を綴った日記をもとに書き上げられた『黒い雨』より、今日（８月６日）は、「このことを書き残さねばならない」と命をかけた原民喜の『夏の花』を読みたいと思います。全文が教科書に掲載されています。全文を読みます。45 分ほどかかります。

『夏の花』　　原 民喜

私は街に出て花を買うと、妻の墓を訪れようと思った。ポケットには仏壇からとり出した線香が１束あった。８月 15 日は妻にとって初盆にあたるのだが、それまでこのふるさとの街が無事かどうかは疑わしかった。ちょうど、休電日ではあったが、朝から花をもって街を歩いている男は、私のほかに見あたらなかった。その花は何という名称なのか知らないが、黄色の小瓣(こべん)の可憐な野趣を帯び、いかにも夏の花らしかった。

炎天にさらされている墓石に水を打ち、その花を２つに分けて左右の花たてに差すと、墓のおもてが何となく清々しくなったようで、私はしばらく花と石に見入った。この墓の下には妻ばかりか、父母の骨も納まっているのだった。持って来た線香にマッチをつけ、黙礼を済ますと私はかたわらの井戸で水を呑んだ。それから、饒津(にぎつ)公園の方を回って家に戻ったのであるが、その日も、その翌日も、私のポケットは線香の匂いがしみこんでいた。原子爆弾に襲われたのは、その翌々日のことであった。

私は厠(かわや)にいたため一命を拾った。８月６日の朝、私は８時頃床を離れた。前の晩２回も空襲警報が出、何事もなかったので、夜明け前には服を全部脱いで、久し振りに寝間着に着替えて眠った。それで、起き出した時もパンツ１つであった。妹はこの姿を見ると、朝寝したことをぶつぶつ難じていたが、私は黙って便所へ入った。

それから何秒後のことかはっきりしないが、突然、私の頭上に一撃が加えられ、目の前に暗闇がすべり墜ちた。私は思わずうわあと喚き頭に手をやって立ち上がった。嵐のようなものの墜落する音のほかは真っ暗でなにもわからない。手探りで扉を開けると、縁側があった。その時まで、私はうわあという自分の声を、ざあーというもの音の中にはっきり耳にきき、目が見えないので悶えていた。しかし、縁側に出ると、間もなく薄らあかりの中に破壊された家屋が浮かび出し、気持ちもはっきりして来た。

それはひどく厭な夢のなかの出来事に似ていた。最初、私の頭に一撃が加えられ目が見えなくなった時、私は自分がたおれてはいないことを知った。それから、ひどく面倒なことになったと思い腹立たしかった。そして、うわあと叫んでいる自分の声が何だか別人の声のように耳にきこえた。しかし、あたりの様子がおぼろながら目に見えだして来ると、今度は惨劇の舞台の中に立っているような気持ちであった。たしか、こういう光景は映画などで見たことがある。もうもうと煙る砂塵の向こうに青い空間が見え、つづいてその空間の数が増えた。壁の脱落したところや、思いがけない方向から明か

りが射して来る。畳の飛び散った坐板の上をそろそろ歩いて行くと、向こうから凄まじい勢いで妹が駈けつけて来た。
「やられなかった、やられなかったの、大丈夫」と妹は叫び、「目から血が出ている、早く洗いなさい」と台所の流しに水道が出ていることを教えてくれた。
私は自分が全裸体でいることを気付いたので、「とにかく着るものはないか」と妹を顧みると、妹は壊れ残った押入れからうまくパンツを取り出してくれた。そこへ誰か奇妙な身振りで闖入して来たものがあった。顔を血だらけにし、シャツ１枚の男は工場の人であったが、私の姿を見ると、「あなたは無事でよかったですな」と言い捨て、「電話、電話、電話をかけなきゃ」と呟きながら忙しそうにどこかへ立ち去った。
到るところに隙間が出来、建具も畳も散乱した家は、柱と閾(しきい)ばかりがはっきりと現れ、しばし奇異な沈黙をつづけていた。これがこの家の最後の姿らしかった。後で知ったところに依ると、この地域では大概の家がぺしゃんこに倒壊したらしいのに、この家は２階も墜ちず床もしっかりしていた。余程しっかりした普請だったのだろう。40 年前、神経質な父が建てさせたものであった。
私は錯乱した畳や襖の上を踏み越えて、身につけるものを探した。上着はすぐに見つかったが、ずぼんを求めてあちこちしていると、滅茶苦茶に散らかった品物の位置と姿が、ふと忙しい目に留まるのであった。昨夜まで読みかかりの本がページをまくれて落ちている。長押(なげし)から墜落した額が殺気を帯びて小床を塞いでいる。ふと、どこからともなく、水筒が見つかり、つづいて帽子が出て来た。ずぼんは見あたらないので、今度は足にはくものを探していた。
その時、座敷の縁側に事務室のKが現れた。Kは私の姿を認めると、
「ああ、やられた、助けてえ」と悲痛な声で呼びかけ、そこへ、ぺったり坐り込んでしまった。額に少し血が噴き出ており、目は涙ぐんでいた。
「どこをやられたのです」と尋ねると、「膝じゃ」とそこを押さえながら皺の多い蒼い顔を歪める。
私は側(そば)にあった布切れを彼に与えておき、靴下を２枚重ねて足にはいた。
「あ、煙が出だした、逃げよう、連れて逃げてくれ」とKはしきりに私を急かし出す。この私よりかなり年上の、しかし平素ははるかに元気なKも、どういうものか少し顛動(てんどう)気味であった。
縁側から見渡せば、一面に崩れ落ちた家屋の塊があり、やや彼方の鉄筋コンクリートの建物が残っているほか、目標になるものも無い。庭の土塀のくつがえった脇に、大きな楓の幹が中途からポックリ折られて、梢を手洗い鉢の上に投げ出している。ふと、Kは防空壕のところへ屈み、「ここで、頑張ろうか、水槽もあるし」と変なことを言う。
「いや、川へ行きましょう」と私が言うと、Kは不審そうに、
「川？ 川はどちらへ行ったら出られるのだったかしら」と嘯(うそぶ)く。
とにかく、逃げるにしてもまだ準備が整わなかった。私は押入れから寝間着をとり出し彼に手渡し、更に縁側の暗幕を引き裂いた。座蒲団も拾った。縁側の畳をはねくり返してみると、持ち逃げ用の雑嚢(ぞうのう)が出て来た。私はほっとしてそのカバンを肩にかけた。隣の製薬会社の倉庫から赤い小さな炎の姿が見えだした。いよいよ逃げだす時機であった。私は最後に、ポックリ折れ曲った楓の側を踏み越えて出

て行った。

その大きな楓は昔から庭の隅にあって、私の少年時代、夢想の対象となっていた樹木である。それが、この春久し振りに郷里の家に帰って暮らすようになってからは、どうも、もう昔のような潤いのある姿が、この樹木からさえ汲みとれないのを、つくづく私は奇異に思っていた。不思議なのは、この郷里全体が、やわらかい自然の調子をうしなって、何か残酷な無機物の集合のように感じられることであった。私は庭に面した座敷に入って行くたびに、「アッシャ家の崩壊」という言葉がひとりでに浮かんでいた。

Kと私とは崩壊した家屋の上を乗り越え、障害物をよけながら、はじめはそろそろと進んで行く。そのうちに、足もとが平坦な地面に達し、道路に出ていることがわかる。すると今度は急ぎ足でとっとと道の中ほどを歩く。ぺしゃんこになった建物の蔭からふと、「おじさん」とわめく声がする。振り返ると、顔を血だらけにした女が泣きながらこちらへ歩いて来る。「助けてえ」と彼女は脅えきった相で一生懸命ついて来る。暫く行くと、路上に立ちはだかって、「家が焼ける、家が焼ける」と子供のように泣き喚いている老女と出会った。煙は崩れた家屋のあちこちから立ち上っていたが、急に炎の息がはげしく吹きまくっているところへ来る。走って、そこを過ぎると、道はまた平坦となり、そして栄橋の袂(たもと)に私達は来ていた。ここには避難者がぞくぞく蝟集(いしゅう)していた。「元気な人はバケツで火を消せ」と誰かが橋の上に頑張っている。私は泉邸(せんてい)の藪の方へ道をとり、そして、ここでKとははぐれてしまった。

その竹藪はなぎ倒され、逃げて行く人の勢いで、道が自然と拓かれていた。見上げる樹木もおおかた中空で削ぎとられており、川に添った、この由緒ある名園も、今は傷だらけの姿であった。ふと、灌木の側にだらりと豊かな肢体を投げ出してうずくまっている中年の婦人の顔があった。魂の抜けはてたその顔は、見ているうちに何か感染しそうになるのであった。こんな顔に出くわしたのは、これがはじめてであった。が、それよりもっと奇怪な顔に、その後私はかぎりなく出くわさねばならなかった。

川岸に出る藪のところで、私は学徒の一塊と出会った。工場から逃げ出した彼女達は一様に軽い負傷をしていたが、いま目の前に出現した出来事の新鮮さにおののきながら、かえって元気そうにしゃべり合っていた。そこへ長兄の姿が現れた。シャツ１枚で、片手にビール瓶を持ち、まず異状なさそうであった。向こう岸も見渡すかぎり建物は崩れ、電柱の残っているほか、もう火の手が回っていた。私は狭い川岸の道へ腰を下ろすと、しかし、もう大丈夫だという気持ちがした。長い間脅かされていたものが、遂に来たるべきものが、来たのだった。さばさばした気持ちで、私は自分が生きながらえていることを顧みた。かねて、２つに１つは助からないかもしれないと思っていたのだが、今、ふと己(おのれ)が生きていることと、その意味が、はっと私を弾(はじ)いた。

このことを書きのこさねばならない、と、私は心に呟いた。けれども、その時はまだ、私はこの空襲の真相をほとんど知ってはいなかったのである。

対岸の火事が勢いを増して来た。こちら側まで火照(ほて)りが反射して来るので、満潮の川水に座蒲団を浸しては頭にかむる。そのうち、誰かが「空襲」と叫ぶ。「白いものを着たものは木蔭へ隠れよ」という声に、皆はぞろぞろ藪の

奥へはって行く。日は燦々(さんさん)と降りそそぎ藪の向こうも、どうやら火が燃えている様子だ。暫く息を殺していたが、何事もなさそうなので、また川の方へ出て来ると、向こう岸の火事は更に衰えていない。熱風が頭上を走り、黒煙が川の中ほどまで煽(あお)られて来る。その時、急に頭上の空が暗黒と化したかと思うと、沛然(はいぜん)として大粒の雨が落ちて来た。雨はあたりの火照りを稍々(やや)鎮めてくれたが、暫くすると、またからりと晴れた天気にもどった。対岸の火事はまだつづいていた。今、こちらの岸には長兄と妹とそれから近所の見知った顔が２つ３つ見受けられたが、みんなは寄り集まって、てんでに今朝の出来事を語り合うのであった。

あの時、兄は事務室のテーブルにいたが、庭さきに閃光(せんこう)が走ると間もなく、１間あまり跳ね飛ばされ、家屋の下敷きになって暫くもがいた。やがて隙間があるのに気づき、そこから這い出すと、工場の方では、学徒が救いを求めて喚叫(きょうかん)している――兄はそれを救い出すのに大奮闘した。妹は玄関のところで光線を見、大急ぎで階段の下に身を潜めたため、あまり負傷を受けなかった。みんな、はじめ自分の家だけ爆撃されたものと思い込んで、外に出てみると、どこも一様にやられているのに唖然(あぜん)とした。それに、地上の家屋は崩壊していながら、爆弾らしい穴があいていないのも不思議であった。あれは、警戒警報が解除になって間もなくのことであった。ピカッと光ったものがあり、マグネシュームを燃すようなシューッという軽い音とともに一瞬さっと足もとが回転し、……それはまるで魔術のようであった、と妹はおののきながら語るのであった。

向こう岸の火が鎮まりかけると、こちらの庭園の木立が燃えだしたという声がする。かすかな煙が後の藪の高い空に見えそめていた。川の水は満潮のままだ引こうとしない。私は石崖(いしがけ)を伝って、水際のところへ降りて行ってみた。すると、すぐ足もとのところを、白木の大きな箱が流れており、箱からはみ出た玉葱があたりにただよっていた。私は箱を引き寄せ、中から玉葱を掴(つか)み出しては、岸の方へ手渡した。これは上流の鉄橋で貨車が顛覆(てんぷく)し、そこからこの箱は放り出されてただよって来たものであった。私が玉葱を拾っていると、「助けてえ」という声がきこえた。木片にとりすがりながら少女が１人、川の中ほどを浮き沈みして流されて来る。私は大きな材木を選ぶとそれを押すようにして泳いで行った。久しく泳いだこともない私ではあったが、思ったより簡単に相手を救い出すことが出来た。

暫く鎮まっていた向こう岸の火が、いつの間にかまた狂い出した。今度は赤い火の中にどす黒い煙が見え、その黒い塊が猛然と拡がって行き、見る見るうちに炎の熱度が増すようであった。が、その無気味な火もやがて燃え尽くすだけ燃えると、空虚な残骸の姿となっていた。その時である、私は川下の方の空に、ちょうど川の中ほどにあたって、ものすごい透明な空気の層が揺れながら移動して来るのに気づいた。竜巻だ、と思ううちにも、烈しい風は既に頭上をよぎろうとしていた。まわりの草木がことごとく慄(ふる)え、と見ると、そのまま引き抜かれて空にさらわれて行く数多(あまた)の樹木があった。空を舞い狂う樹木は矢のような勢いで、混濁の中に墜ちて行く。私はこの時、あたりの空気がどんな色彩であったか、はっきり覚えてはいない。が、恐らく、ひどく陰惨な、地獄絵巻の緑の微光につつまれていたのではないかと思えるのである。

この竜巻が過ぎると、もう夕方に近い空の気配が感じられていたが、今迄姿を見せなかった２番目の兄が、ふとこちらにやって来たのであった。顔にさっと薄墨色の跡があり、背のシャツも引き裂かれている。その海水浴で日やけした位の皮膚の跡が、後には化膿を伴う火傷(やけど)となり、数カ月も治療を要したのだが、この時はまだこの兄もなかなか元気であった。彼は自宅へ用事で帰ったとたん、上空に小さな飛行機を認め、つづいて３つのあやしい光を見た。それから地上に１間あまり跳ね飛ばされた彼は、家の下敷きになってもがいている家内と女中を救い出し、子供２人は女中に託して先に逃げのびさせ、隣家の老人を助けるのにてまどっていたという。

嫂(あによめ)がしきりに別れた子供のことを案じていると、向こう岸の河原から女中の呼ぶ声がした。手が痛くて、もう子供を抱えきれないから早く来てくれというのであった。

泉邸の杜(もり)も少しずつ燃えていた。夜になってこの辺まで燃え移って来るといけないし、明るいうちに向こう岸の方へ渡りたかった。が、そこいらには渡し舟も見あたらなかった。長兄たちは橋を回って向こう岸へ行くことにし、私と２番目の兄とはまた渡し舟を求めて上流の方へ溯(さかのぼ)って行った。水に添う狭い石の通路を進んで行くにしたがって、私はここではじめて、言語に絶する人々の群れを見たのである。既に傾いた日ざしは、あたりの光景を青ざめさせていたが、岸の上にも岸の下にも、そのような人々がいて、水に影を落としていた。どのような人々であるか……。男であるのか、女であるのか、ほとんど区別もつかない程、顔がくちゃくちゃに腫れ上がって、従って目は糸のように細まり、唇は思いきりただれ、それに、痛々しい肢体を露出させ、虫の息で彼等は横たわっているのであった。私達がその前を通って行くに従ってその奇怪な人々は細い優しい声で呼びかけた。「水を少し飲ませて下さい」とか、「助けて下さい」とか、ほとんどみんながみんな訴えごとを持っているのだった。

「おじさん」と鋭い哀切(あいせつ)な声で私は呼びとめられていた。見ればすぐそこの川の中には、裸体の少年がすっぽり頭まで水につかって死んでいたが、その死体と半間も隔たらない石段のところに、２人の女がうずくまっていた。その顔は約１倍半も膨脹し、醜く歪み、焦げた乱髪が女であるしるしを残している。これは一目見て、憐愍(れんびん)よりもまず、身の毛のよだつ姿であった。が、その女達は、私の立ちどまったのを見ると、

「あの木のところにある蒲団は私のですからここへ持って来て下さいませんか」と哀願するのであった。

見ると、木のところには、なるほど蒲団らしいものはあった。だが、その上にはやはり瀕死(ひんし)の重傷者が臥(ふ)していて、既にどうにもならないのであった。

私達は小さな筏(いかだ)を見つけたので、綱を解いて、向こう岸の方へ漕いで行った。筏が向こうの砂原に着いた時、あたりはもう薄暗かったが、ここにも沢山の負傷者が控えているらしかった。水際にうずくまっていた１人の兵士が、「お湯をのましてくれ」と頼むので、私は彼を自分の肩に依り掛からしてやりながら、歩いて行った。苦しげに、彼はよろよろと砂の上を進んでいたが、ふと、「死んだ方がましさ」と吐き棄てるように呟(つぶや)いた。私も暗然としてうなずき、言葉は出なかった。愚劣なものに対する、やりきれない憤りが、この時我々を無言で結びつけているようであった。私は彼を中途に待たしておき、土手の上にある給湯所を石

崖の下から見上げた。すると、今湯気の立ち上っている台のところで、茶碗を抱えて、黒こげの大頭がゆっくりと、お湯を呑んでいるのであった。その厖大(ぼうだい)な、奇妙な顔は全体が黒豆の粒々で出来上がっているようであった。それに頭髪は耳のあたりで一直線に刈り上げられていた。(その後、一直線に頭髪の刈り上げられている火傷者を見るにつけ、これは帽子を境に髪が焼きとられているのだということを気付くようになった。)暫くして、茶碗をもらうと、私はさっきの兵隊のところへ持ち運んで行った。ふと見ると、川の中に、これは１人の重傷兵が膝をかがめて、そこで思いきり川の水を呑みふけっているのであった。

夕闇の中に泉邸の空やすぐ近くの炎があざやかに浮き出て来ると、砂原では木片を燃やして夕餉(ゆうげ)の焚(た)き出しをするものもあった。さっきから私のすぐ側に顔をふわふわに膨(ふく)らした女が横たわっていたが、水をくれという声で、私ははじめて、それが次兄の家の女中であることに気づいた。彼女は赤ん坊を抱えて台所から出かかった時、光線に遭い、顔と胸と手を焼かれた。それから、赤ん坊と長女を連れて兄達より一足さきに逃げたが、橋のところで長女とはぐれ、赤ん坊だけを抱えてこの河原に来ていたのである。最初顔に受けた光線をさえぎろうとして覆った手が、その手が、今ももぎとられるほど痛いと訴えている。

潮が満ちて来だしたので、私達はこの河原を立ちのいて、土手の方へ移って行った。日はとっぷり暮れたが、「水をくれ、水をくれ」と狂いまわる声があちこちできこえ、河原にとり残されている人々の騒ぎはだんだん烈しくなって来るようであった。この土手の上は風があって、眠るには少し冷々していた。すぐ向こうは饒津公園であるが、そこも今は闇にとざされ、木の折れた姿がかすかに見えるだけであった。兄達は土の窪みに横たわり、私も別に窪地をみつけて、そこへ入って行った。すぐ側には傷ついた女学生３、４人横臥(おうが)していた。

「向こうの木立が燃えだしたが逃げた方がいいのではないかしら」と誰かが心配する。窪地を出て向こうを見ると、２、３町さきの木に炎がキラキラしていたが、こちらへ燃え移って来そうな気配もなかった。

「火は燃えて来そうですか」と傷ついた少女は脅えながら私に訊(き)く。

「大丈夫だ」と教えてやると、「今、何時頃でしょう、まだ 12 時にはなりませんか」とまた訊く。

その時、警戒警報が出た。どこかにまだ壊れなかったサイレンがあるとみえて、かすかにその響きがする。街の方はまださかんに燃えているらしく、茫(ぼう)とした明かりが川下の方に見える。

「ああ、早く朝にならないのかなあ」と女学生は嘆く。

「お母さん、お父さん」とかすかに静かな声で合唱している。

「火はこちらへ燃えて来そうですか」と傷ついた少女がまた私に訊(たず)ねる。

河原の方では、誰か余程元気な若者らしいものの、断末魔のうめき声がする。その声は八方にこだまし、走り回っている。「水を、水を、水を下さい、……ああ、……お母さん、……姉さん、……光ちゃん」と声は全身全霊を引き裂くようにほとばしり、「ウウ、ウウ」と苦痛に追いまくられる喘ぎが弱々しくそれに絡んでいる。

――幼い日、私はこの堤を通って、その河原に魚を獲(と)りに来たことがある。その暑い日の１日の記憶は不思議にはっきりと残っている。砂原にはライオン歯磨きの大きな立看板があ

り、鉄橋の方を時々、汽車が轟(ごう)と通って行った。夢のように平和な景色があったものだ。

夜が明けると昨夜の声はやんでいた。あの腸(はらわた)を絞る断末魔の声はまだ耳底に残っているようでもあったが、あたりは白々と朝の風が流れていた。長兄と妹とは家の焼跡の方へ回り、東練兵場に施療所があるというので、次兄達はそちらへ出掛けた。私もそろそろ、東練兵場の方へ行こうとすると、側にいた兵隊が同行を頼んだ。その大きな兵隊は、余程ひどく傷ついているのだろう、私の肩によりかかりながら、まるで壊れものを運んでいるように、おずおずと自分の足を進めて行く。それに足もとは、破片といわず屍(しかばね)といわずまだ余熱を燻(い)ぶらしていて、恐ろしく険悪であった。常盤橋まで来ると、兵隊は疲れはて、もう１歩も歩けないから置き去りにしてくれという。そこで私は彼と別れ、１人で饒津公園の方へ進んだ。ところどころ崩れたままで焼け残っている家屋もあったが、至るところ、光の爪跡が印されているようであった。とある空き地に人が集まっていた。水道がちょろちょろ出ているのであった。ふとその時、姪が東照宮の避難所で保護されているということを、私は小耳にはさんだ。

急いで、東照宮の境内へ行ってみた。すると、いま、小さな姪は母親と対面しているところであった。昨日、橋のところで女中とはぐれ、それから後は他所(よそ)の人について逃げて行ったのであるが、彼女は母親の姿を見ると、急に堪えられなくなったように泣きだした。その首が火傷で黒く痛そうであった。

施療所は東照宮の鳥居の下の方に設けられていた。はじめ巡査が１通り原籍年齢などを取り調べ、それを記入した紙片をもらってからも、負傷者達は長い行列を組んだまま炎天の下にまだ１時間位は待たされているのであった。だが、この行列に加われる負傷者ならまだ結構な方かもしれないのだった。今も、「兵隊さん、兵隊さん、助けてよう、兵隊さん」と火のついたように泣きわめく声がする。路傍にたおれて反転する火傷の娘であった。かと思うと、警防団の服装をした男が、火傷で膨脹した頭を石の上に横たえたまま、まっ黒の口をあけて、「誰か私を助けて下さい、ああ看護婦さん、先生」と弱い声できれぎれに訴えているのである。が、誰も顧みてはくれないのであった。巡査も医者も看護婦も、みな他の都市から応援に来たものばかりで、その数も限られていた。

私は次兄の家の女中に付き添って行列に加わっていたが、この女中も、今はだんだんひどく膨れ上がって、どうかすると地面にうずくまりたがった。ようやく順番が来て加療が済むと、私達はこれから憩う場所を作らねばならなかった。境内至るところに重傷者はごろごろしているが、テントも木蔭も見あたらない。そこで、石崖に薄い材木を並べ、それで屋根のかわりとし、その下へ私達は入り込んだ。この狭苦しい場所で、24 時間あまり、私達６名は暮らしたのであった。

すぐ隣にも同じような恰好の場所が設けてあったが、その筵(むしろ)の上にひょこひょこ動いている男が、私の方へ声をかけた。シャツも上着もなかったし、長ずぼんが片足分だけ腰のあたりに残されていて、両手、両足、顔をやられていた。この男は、中国ビルの７階で爆弾にあったのだそうだが、そんな姿になりはてても、すこぶる気丈夫なのだろう、口で人に頼み、口で人を使いとうとうここまで落ちのびて来たのである。そこへ今、満身血まみれの、幹部候補生のバンドをした青年が迷い込んで来た。すると、隣の男はきっとなって、

「おい、おい、どいてくれ、俺の体はめちゃくちゃになっているのだから、触りでもしたら承知しないぞ、いくらでも場所はあるのに、わざわざこんな狭いところへやって来なくてもいいじゃないか、え、とっとと去ってくれ」と唸るようにおっかぶせて言った。血まみれの青年はきょとんとして腰をあげた。

私達の寝転んでいる場所から２メートルあまりの地点に、葉のあまりない桜の木があったが、その下に女学生が２人ごろりと横わっていた。どちらも、顔を黒焦げにしていて、やせた背を炎天にさらし、水を求めては呻(うめ)いている。この近辺へ芋掘り作業に来て遭難した女子商業の学徒であった。そこへまた、燻製の顔をした、モンペ姿の婦人がやって来ると、ハンドバッグを下に置きぐったりと膝を伸ばした。……日は既に暮れかかっていた。ここでまた夜を迎えるのかと思うと私は妙に佗しかった。

夜明け前から念仏の声がしきりにしていた。ここでは誰かが、絶えず死んで行くらしかった。朝の日が高くなった頃、女子商業の生徒も、２人とも息をひきとった。溝にうつ伏せになっている死骸を調べおえた巡査が、モンペ姿の婦人の方へ近づいて来た。これも姿勢を崩して今はことときれているらしかった。巡査がハンドバッグをひらいてみると、通帳や公債が出て来た。旅装のまま、遭難した婦人であることが判った。

昼頃になると、空襲警報が出て、爆音もきこえる。あたりの悲惨醜怪(ひさんしゅうかい)さにも大分馴らされているものの、疲労と空腹はだんだん激しくなって行った。次兄の家の長男と末の息子は、２人とも市内の学校へ行っていたので、まだ、どうなっているかわからないのであった。人はつぎつぎに死んで行き、死骸はそのまま放ってある。救いのない気持ちで人はそわそわ歩いている。それなのに、練兵場の方では、いま自棄(やけ)に嚠喨(りゅうりょう)として喇叭(らっぱ)が吹奏されていた。

火傷した姪たちはひどく泣き喚くし、女中はしきりに水をくれと訴える。いい加減、みんなほとほと弱っているところへ、長兄が戻って来た。彼は昨日は嫂の疎開先である廿日市(はつかいち)町の方へ寄り、今日は八幡村の方へ交渉して荷馬車をやとって来たのである。そこでその馬車に乗って私達はここを引き揚げることになった。

馬車は次兄の１家族と私と妹を乗せて、東照宮下から饒津へ出た。馬車が白島から泉邸入口の方へ来かかった時のことである。西練兵場寄りの空き地に、見憶えのある、黄色の、半ずぼんの死体を、次兄はちらりと見つけた。そして彼は馬車を降りて行った。嫂も私もつづいて馬車を離れ、そこへ集まった。見憶えのあるずぼんに、まぎれもないバンドを締めている。死体は甥の文彦であった。上着は無く、胸のあたりに拳(こぶし)大の腫れものがあり、そこから液体が流れている。真っ黒くなった顔に、白い歯がかすかに見え、投げ出した両手の指は固く、内側に握り締め、爪が食い込んでいた。その側に中学生の死体が１つ、それから又離れたところに、若い女の死体が１つ、いずれも、ある姿勢のまま硬直していた。次兄は文彦の爪を剥ぎ、バンドを形見にとり、名札をつけて、そこを立ち去った。涙も乾きはてた遭遇であった。

馬車はそれから国泰寺の方へ出、住吉橋を越して己斐(こい)の方へ出たので、私はほとんど目抜きの焼跡を一覧することが出来た。ギラギラと炎天の下に横わっている銀色の虚無のひろがりの中に、道があり、川があり、橋があっ

た。そして、赤むけの膨れ上がった死体がところどころに配置されていた。これは精密巧緻(こうち)な方法で実現された新地獄に違いなく、ここではすべて人間的なものは抹殺され、たとえば死体の表情にしたところで、何か模型的な機械的なものに置き換えられているのであった。苦悶の一瞬あがいて硬直したらしい肢体は一種の妖しいリズムを含んでいる。電線の乱れ落ちた線や、おびただしい破片で、虚無の中に痙攣的の図案が感じられる。だが、さっと転覆して焼けてしまったらしい電車や、巨大な胴を投げ出して転倒している馬を見ると、どうも、超現実派の画の世界ではないかと思えるのである。国泰寺の大きな楠（くすのき）も根こそぎ転覆していたし、墓石も散っていた。外郭だけ残っている浅野図書館は死体収容所となっていた。道はまだところどころで煙(けむ)り、死臭に満ちている。川を越すたびに、橋が墜ちていないのを意外に思った。この辺の印象は、どうも片仮名で描きなぐる方がふさわしいようだ。それで次に、そんな１節を挿入しておく。

ギラギラノ破片ヤ
灰白色ノ燃エガラガ
ヒロビロトシタ　パノラマノヨウニ
アカクヤケタダレタ　ニンゲンノ死体ノキミョウナリズム
スベテアッタコトカ　アリエタコトナノカ
パット剥ギトッテシマッタ　アトノセカイ
テンプクシタ電車ノワキノ
馬ノ胴ナンカノ　フクラミカタハ
ブスブストケムル電線ノニオイ

倒壊の跡のはてしなくつづく道を馬車は進んで行った。郊外に出ても崩れている家屋が並んでいたが、草津をすぎると漸くあたりも青々として災禍の色から解放されていた。そして青田の上をすいすいと蜻蛉(とんぼ)の群れが飛んでゆくのが目に沁みた。それから八幡村までの長い単調な道があった。八幡村へ着いたのは、日もとっぷり暮れた頃であった。そして翌日から、その土地での、悲惨な生活が始まった。負傷者の回復もはかどらなかったが、元気だったものも、食糧不足からだんだん衰弱して行った。火傷した女中の腕はひどく化膿し、蠅(はえ)が群れて、とうとう蛆(うじ)が湧くようになった。蛆はいくら消毒しても、後から後から湧いた。そして、彼女は１カ月あまりの後、死んで行った。

この村へ移って４、５日目に、行方不明であった中学生の甥が帰って来た。彼はあの朝、建物の疎開のため学校へ行ったがちょうど、教室にいた時光を見た。瞬間、机の下に身を伏せ、次いで天井が墜ちて埋もれたが、隙間を見つけて這い出した。這い出して逃げのびた生徒は４、５名にすぎず、他は全部、最初の一撃で駄目になっていた。彼は４、５名と一緒に比治山(ひじやま)に逃げ、途中で白い液体を吐いた。それから一緒に逃げた友人のところへ汽車で行き、そこで世話になっていたのだそうだ。しかし、この甥もこちらへ帰って来て、１週間あまりすると、頭髪が抜け出し、２日位ですっかり禿になってしまった。今度の遭難者で、頭髪が抜け鼻血が出だすと大概助からない、という説がその頃大分ひろまっていた。頭髪が抜けてから 12、13 日目に、甥はとうとう鼻血を出しだした。医者はその夜が既にあぶなかろうと宣告していた。しかし、彼は重態のままだんだん持ちこたえて行くのであった。

Ｎは疎開工場の方へはじめて汽車で出掛けて行く途中、ちょうど汽車がトンネルに入った

時、あの衝撃を受けた。トンネルを出て、広島の方を見ると、落下傘が３つ、ゆるく流れてゆくのであった。それから次の駅に汽車が着くと、駅のガラス窓がひどく壊れているのに驚いた。やがて、目的地まで達した時には、既に詳しい情報が伝わっていた。彼はその足ですぐ引き返すようにして汽車に乗った。すれ違う列車はみな奇怪な重傷者を満載していた。彼は街の火災が鎮まるのを待ちかねて、まだ熱いアスファルトの上をずんずん進んで行った。そして１番に妻の勤めている女学校へ行った。教室の焼跡には、生徒の骨があり、校長室の跡には校長らしい白骨があった。が、Ｎの妻らしいものは遂に見出せなかった。彼は大急ぎで自宅の方へ引き返してみた。そこは宇品の近くで家が崩れただけで火災は免れていた。が、そこにも妻の姿は見つからなかった。それから今度は自宅から女学校へ通じる道にたおれている死体を１つ１つ調べてみた。大概の死体がうつぶせになっているので、それを抱き起こしては首実験するのであったが、どの女もどの女も変わりはてた相をしていたが、しかし彼の妻ではなかった。しまいには方角違いのところまで、ふらふらと見て回った。水槽の中に折り重なってつかっている 10 あまりの死体もあった。河岸(かし)にかかっている梯子に手をかけながら、そのまま硬直している３つの死骸があった。バスを待つ行列の死骸は立ったまま、前の人の肩に爪を立てて死んでいた。郡部から家屋疎開の勤労奉仕に動員されて、全滅している群れも見た。西練兵場の物凄さといったらなかった。そこは兵隊の死の山であった。しかし、どこにも妻の死骸はなかった。

Ｎは至るところの収容所を訪ね回って、重傷者の顔を覗き込んだ。どの顔も悲惨のきわみではあったが、彼の妻の顔ではなかった。そうして、３日３晩、死体と火傷患者をうんざりするほど見てすごした挙句、Ｎは最後にまた妻の勤め先である女学校の焼跡を訪れた。

◆おわりに

『夏の花』は、原爆の実相を描いた作品です。抗うことのできない出来事を前にしての様々な人間の心理までも描き出されています。夏の光があり、茶碗を抱えてお湯を呑んでいる黒焦げの大頭があり、河岸にかかっている梯子に手をかけたまま硬直している死骸があり、地に伏して水を求める声があり、その中に玉葱が漂い、喇叭が鳴り、瀕死の人々の生きる闘争がある。冒頭の妻の墓参と最後の、唐突に現れて唐突に終わる妻を探し回るＮの記述はおそらく呼応関係にあると思われます。

皆様のお心に少しでも留めていただけましたらと思います。

社会委員会からのお知らせ

★いつも社会委員会の活動にご協力くださり、ありがとうございます。

★今年度も寿町、桜本教会、海員宣教に越冬支援物資をお届けいたします。詳細が決まりましたら、週報などでご連絡いたします。ご協力ください。

★１月頃、社会委員会講演会を開催予定です。それに先立ち、社会委員会で対話を重ねて準備して参りたいと思っております。どうぞご期待ください。